

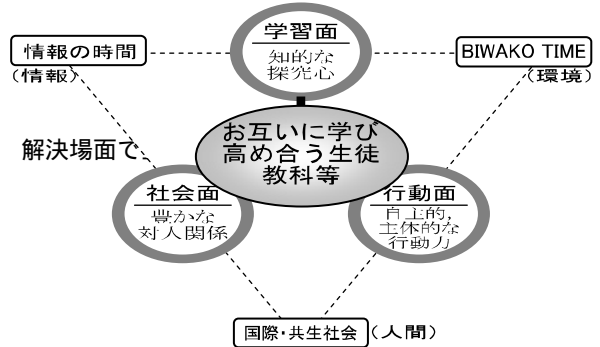
はじめに

学習指導要領では、重要事項の第一として「言語活動の充実」を求めています。本校では、教科等や総合的な学習の時間での学びを深めていく研究の過程で、生徒の言語活動を生み出すには、「情報のみかた」の学習が欠かせないと考えようになりました。そこで、情報機器利用指導の色彩の濃い旧来の情報教育とは違う新しい情報教育を模索するため、3年間にわたって、「総合情報学」における情報の概念や情報のとらえ方に多くを学びながら、中学生に必要な情報教育を新たに開発してきました。その核として、総合的な学習の時間に、教科横断的な内容の「情報の時間」を実施しています。

「言語活動の充実」とは何か、そのために必要な思考力を深める情報吟味の観点をどのように設定するか等、今日と明日の日本の教育課題について、みなさまとともに考えていければ幸いです。

本校の研究の概要 平成 22(2010)年度

1. 学校教育目標
郷土を愛し世界へはばたく心豊かな生徒の育成
2. 研究テーマ
文部科学省研究開発指定（一年次）
教科等ならびに総合的な学習の時間における言語活用能力の向上を図るための、教科横断型「情報の時間」開設を核とした教育課程の開発
3. 本校の「豊かな学力」の捉え方
知識・技能の量...学んだ力，学習到達度，学校知
思考・判断・表現力など...学ぶ力，学び方，機能的
学力，方法知
学習意欲...学ぼうとする力
学んだことを活用する力...集団で高め合う力，問題



4. 本校の学習領域

必修教科	基本的な知識・技能の確かな定着を図る。
選択教科	生徒の特性等に応じて、個の伸長を図る。
「BIWAKO TIME」	環境・郷土を題材として調査研究を行い、学び方を学ぶ。
「国際理解・共生社会への参加」	人間の生き方に関わって、よりよい生き方を学ぶ。
「情報の時間」	高度情報通信社会への対応。情報を活用する力の向上を図る。
「科学技術科」	エネルギーと環境問題について、多面的な見方を学ぶ。

「情報の授業」の概要：平成 18(2007)年度～

1. 情報の授業の目標
批判的思考力・問題解決能力・問題発見能力を育成し、生徒の感性と論理的に考える力を高めることと、高度情報通信社会に生きる力の育成を図ることを情報の授業の目標にしました。

2. 情報の授業の設計
内容の中核として、中学生の学校生活や社会生活を観察して特に必要と考えられる三つの「視点」を設定しました。

- A 情報の本質を探究する
- C 情報の活用を実行する
- E 情報の内容を吟味する

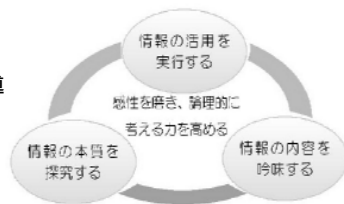
次に、それらを関連させながら指導することをねらって、A C間をB，C E間をD，E A間をFとして

- B 本質を知って活用
- D 内容を吟味して活用
- F 本質を知って内容を吟味

という三つの「補完する中間の視点」を設定し、以上の六つを“情報科”の内容としました。内容の配当にあたっては、本校は2期(前期・後期)制を採用していますので、期ごとに1年生ではAとその対極D，2年生ではCとその対極F，3年生ではEとその対極Fを割り当てて各学年で本質・活用・吟味を学べるようにすることで、系統性を保ちつつ螺旋的な内容の深まりも期待できるような形を骨格にしました。

3. 配当時間と指導体制

操作を伴う活動の多い単位には8時間，知識理解が中心となる単位には5時間を配当し，2～3名のチーム・ティーチングで指導することで，職員の専門性を生かしつつ全員が指導に関わるようにしました。



学年・内容		単元
1年生	シニコ ヨケミ ン ィ ユ	人とのコミュニケーション
		メディアによるコミュニケーション
	情報の活用	アイデアを練ろう 分析しよう 発表しよう
2年生	とデ 情 報 タ	データ量と情報量 データの質とデジタルデータ
		情報の処理 データを集めよう データを処理しよう 情報を表現しよう
	3年生	創 思 考 と
情報社会 情報の本質 情報と経済・犯罪 これからの情報社会		

情報教育の転機

「BIWAKO TIME」の変遷と「メディア学習」のはじまり

昭和50年代に知育偏重、進学一辺倒、輪切りの教育などが、大きな問題になりました。本校では、このような状況は、実は一人一人の生徒の特性を生かしていない点が問題であること、そして基礎的な学力を定着させ、個々の創造性を発揮させることが重要であると考えました。

本校は、昭和57(1982)年度から3カ年にわたって、文部省の研究開発学校の指定を受け、教育課程の改善のための研究開発に取り組み、「基礎的な学力の一層の定着を図り創造的知性を育てる教育課程の実践研究」という主題のもと研究をスタートしました。

この研究の中で、自主的・主体的な学習の仕方を身に付け、正しい判断力と実践力を培うためには、教科学習を統合的・総合的に学習する内容が必要であること、そして、教室という学習の場の枠を取り払い、自由度の高い学習を設定することの重要性を認識しました。その結果、このねらいを達成する活動を充実し、「教科学習」との連携を図る目的で、昭和58(1983)年度後期より、「郷土学習」-びわ湖と私たち-、いわゆる「びわ湖学習」を開始しました。その後「びわ湖学習」は「BIWAKO TIME」と名前を変え、その時点で最善と思われる運用方法で、現在に至る26年間にわたって、生徒の探求の舞台を提供してきました。

「びわこ学習」において、学習成果の記録や発表方法をさらに充実させるべく、1991(平成3)年度から「特設コンピュータ学習」や「メディア講習会」を開設して、機器操作能力の向上を主なねらいとして、多種の情報・視聴覚メディアの効果的な活用方法を指導してきました。しかし、単発的に講座を開設するだけでは効果が薄いことから、各教科が特定の機器操作を重点的に身につけさせるよう、各教科の授業に意識的に組み込むように改善しました。例えば、美術はカメラ操作、理科はビデオカメラ操作、国語はOHP操作、技術はコンピュータ操作に習熟させるように、役割分担をしたのです。これらの「メディア学習」によって、「びわ湖学習」は力強い推進力を得ることになりました。

本校の「びわ湖学習」「BIWAKO TIME」の変遷

年度	学習の名称	含む領域	内容等
昭和55 昭和56			自己を磨く活動として自主的課題研究に取り組み学年の枠をはずし、必要に応じ助言する学習の開始。
昭和57 昭和58 昭和59	総合学習を位置づける 郷土学習(びわ湖と私たち)	総合学習 郷土学習(びわ湖学習) 性教育 生徒会活動 校外学習 道徳 英会話2年 人権学習 選択教科3年 フリータイム	自主学習の時間の設定。構成員数を限定せず自主的選択学習の開始。 18のテーマ別分科会を設定し、異学年縦割りの学際的自由研究活動へと発展する。文部省の研究開発校の指定を受けた取り組み。
昭和60 昭和61 昭和62	郷土学習	総合学習 〔びわ湖学習〕 性教育	1年生を対象に基礎講座の設定。発表会に向けてのメディア講習会を開く。深まりのある話し合い活動の展開の指導。
昭和63 平成元 平成2	びわ湖学習	総合活動 〔校外学習〕 〔生徒会活動〕 に分離する	
平成3 平成4 平成5			環境学習、国際理解学習を展開する。
平成6 平成7 平成8	「BIWAKO TIME」	郷土学習 国際理解 環境教育 グロブ計画	びわ湖学習と国際理解学習をドッキングする。1,2年生郷土、国際理解学習で10分科会の開始。3年生は環境学習で外部講師による講話を実施。 「BIWAKO TIME」……「学び方を学ぶ」郷土学習、国際理解学習、環境学習のそれぞれに5分科会を開設する。
平成9~		環境・郷土に焦点化を図る	開設する領域・分科会の数を変更しながら現在に至る。

「情報生活科」への改編

「メディア学習」が大きく転換を迫られることになったのは、1999(平成11)年1月にマルチメディア対応パソコン41台が整備されたことによります。コンピュータの高機能化や、ネットワークに接続して使用する運用方法などによって、次のような問題が生じたのです。

- ・教師が研修すべき内容の増加
- ・コンピュータ操作に長けた生徒の登場
- ・インターネットに接続することの光と影
- ・機器の維持・管理の難しさ

このため、情報を見極めて取捨選択する能力の育成や、モラル・マナーを重視した指導が求められるようになり、単なる操作方法を学ぶだけの「メディア学習」からの脱皮を図り、以下のような能力、態度の育成にも取り組んでいきたいと考えました。

- ・情報を見抜く力
- ・情報を活用する資質や問題解決能力
- ・身近な生活と情報の関わりについての正しい認識
- ・情報倫理、マナー